

台風は、赤道付近で、一年中発生しますが、日本にや
つて来るのは、七月から十月にかけてです。

これまでは、被害の多かった台風は、昭和三十四年（
一九五九年）九月に、中部地方の伊勢湾付近に上陸した
伊勢湾台風です。この時死んだ人や行方不明の人が約五
千人、五十七万棟の建物に害がでました。

また、冬から春にかけて、台湾近海で発生する温帯低気
圧を、台湾坊主とよんでいます。

中国大陸の、乾燥した冷たい大陸性気団が東進し、黒
潮の流れる中国東岸に達すると、暖かい海から水蒸気と
熱エネルギーを供給され、気団変質を起し、ときには、
台風並みのエネルギーを持つ低気圧に発達して、北上し、
日本列島に襲来し、そして思いがけない被害をもたらす
ます。

たとえば、昭和四十二年冬の台湾坊主は、東京に豪雪
を降らせ、通勤ダイヤを大幅にマヒさせました。

これによつて、漁船も時々遭難して、悲劇を生じてい
ます。

この大陸東岸の中緯度地帯で発生する低気圧は、中国
東岸特有の現象で、世界中各地の大陸東岸にみられ
ます。

こんど日本の提案により、大気の動きを地球規模で研
究するGARP（地球大気観測計画）の一環として、気
団変質の機構を、国際協力で解明することになりました。

昭和四十九、五十年の冬の二階にわたつて、沖繩を
中心に六隻の観測船を派遣するなどして、大がかりな観
測を実施することになりました。（つづく）

研究

用未城由未記

井、鐘割の伝説

直川村史談会々員
佐伯文義会友

櫻 井 幸

国道十号線の沿線、大字仁田原用未郡落の背後に、用
未城址がある。東南方を久留須川の清流が山裾を洗い、
西方は宇目所ノ境に続く長い尾根の、險阻を先端を振り
割り、北方は断崖絶壁で、実に要害の地である。

春風秋雨幾屋霜、城址は雜草、雑木に覆われ、絶壁は
蒼蒼し、掘割は埋もれて、僅かにその跡を止めている。
城についての明らかでない記録もなく、ただ往時より里人
によつて語りつがれた伝説により、城の由来を探るのみ
である。

伝説によつても、この城は、佐伯氏の柵竿社の支城で
あったことは明らかで、天正年間、薩摩の島津勢の侵入
に備えて、構築されたものと思われる。

この城の上流五〇〇米位の所に下城郡落があり、そこ
に出城があったことも明らかで、下城は出城の転訛した
ものと思われる。後世になき風俗によつて下治郡と文字
を充てたり、地名の転訛に長大息するものである。

豊筑乱記によれば、天正十四年十月、島津家久の軍勢
は日向から峰山を越えて、豊後国大野郡宇目郷に上りつ
た。朝日岳城主であった野津院の柴田紹安の内通によつ
て、大野郡の蒲城は相次いで陥落し、海部郡の佐伯氏の
柵竿社城を攻めたが、佐伯惟定は死守して屈せず、後に

豊臣秀吉を感劔させ、感状と受けたと記されてある。

筆者の考察によれば、宇目郷朝日岳城から榎杵礼城を攻める途中にある用米城は、この時島津の大軍によつて陥落したものである。小さな城であつたので、城主の名も不明で、古文書を探しても見出し得ず、伝説によつて往路を追懐し、小城に拠つて島津の大軍と戦い、全滅した勇士の霊を弔うの又である。下城處跡の慰霊塔、黙々とて語るす。

(付記)

用米城の名林について筆者の卓見を述べると、用米の地名は、矢米の転訛したものでないかと思ふ。何故かざれば、用米の地名は何の意味を持たず、附近に一、二、矢、一、矢、返、一、等、の地名があり、古人の伝えるところによると、城の南方日向國境の一、矢、返、一、(杭、内、奥)に矢を射り、その矢を城に射通して、日向よりの侵入に備えて、訓練していたとのことで、下城の東南方は大ガ山、ヒ、という地名があるが、これが一、矢、返、一、に矢を射たとき、手許が狂つて、そこに落ちたので、大ガ山ヒと名付けられ、少し狂つて落ちた所を小ガ山、小の原と呼びられたと伝えられている。筆者の畑がその小ガ山ヒの原にあつて、よく祖父や父から聞かされたものである。

それから大字横川の井、取、越、に、小、用、米、と、称する地名があるが、これも小、矢、米、の転訛したものでないかと思ふ。横川方面からの侵入に備えて、小、矢、米、を、組、ん、だ、り、て、は、ないか、又、井、取、も、取、の、転、訛、した、と、い、う、伝、説、がある。

なお、城の東方、川を隔てて戸の畑という地名があるが、これも古人の伝える所によると、城主の野茶畑があつたので、殿畑と呼ばれたやうである。無知な後

人や農氏たちによつて、地名の変更転訛された別日多。い。実に遺憾なことである。

鐘 測 の 伝 説

用米城址の北面断崖の下に、天満社があり、その百米程の上流溪谷に鐘測という所がある。伝説によると昔は洞窟があつて、そこから水が流すと、横川の底の木の上の「みよか測」に、流れ出たと伝えられている。

この測から約二百米の小丘の上に寺があつて、用米城と向かい合つていたという。天正年間、キリシタンを信仰した大友宗麟のために、煉計ちされ、寺の住職は鐘をかぶつて、この測の洞穴に投身したという。

昔は、この穴に石を投げこめば、鐘の音がしたと伝えられている。

寺の下に部落は、今でも寺の下と呼びれており、この部落に榎井善太郎という者があつた。五十年程前へ大正年間一家屋を壊した時、屋根裏に煤けた長持があつたので、開けて見たら、経巻や書類が一杯はいつていたといふが、無知な人達は、これを焼いてしまつたやうで、実に惜しいことなしたと思ふ。これは和尚が投身する前に、経巻や寺の記録と預けたのではないかと考へる。寺の名称も宗旨も全く不明である。

先年同部落の松井兼五郎氏が劍術学会に入信し、自分の山林の中にあつた古塔十数基を、悉く破壊して付近の竹叢に放棄した。筆者と休石博美氏が調査したところ、中に「長享三年」と刻まれた破片を発見した。長享三年は一四八九年に当り、後土御門天皇の御宇で、室町時代の足利義尚の時代である。

寺もその時代からあつたと考へられる。

(住所) 南海郡那直山村仁田原